

ホテルのニュースレター

日本ホテルの会 2009 / 3 第47号

エッセイ ―ホテルと私③―

感動を伝えるために

日本ホテルの会会長 本多 和彦

ニュースレターの巻頭は久しぶりです。今回は、ホテルと私という題をいただいておりますので、ホテルに関わるきっかけとホテルの会の活動について紹介させていただきたいと思います。

以前にも本誌にて紹介したことがあると思いますが、私がホテルと出会うことになったきっかけは、水との出会いです。1981年、横須賀市の下水処理場の水質管理担当になり、人の活動で汚れた水をきれいにしてもう一度自然に返すという仕事に就きました。この仕事は、若かった私にとってとてもやりがいのあることでした。一方、その頃同じ職場の業務で、市内の河川水質調査も行っていました。すると、多くの川が2面張り、3面張りのコンクリートで覆われていることに改めて気づきました。水をきれいにすることは大切であるが、このままではいくらきれいな水が戻っても、豊かな自然が戻ることはないのだと思いました。そこで、水処理から一歩考えを進め、身近な環境について考えるようになり、横須賀市自然博物館の大場さんや同僚と「水系環境を考える会」をつくり、横須賀市内を流れる岩戸川改修を舞台に地

域の方々と活動を行い、水辺環境について学びました。それまでは、横須賀にホテルがいるということに考えが及んでいませんでした。海や山の自然は好きでしたが、そうした環境に目を向けることがなかったと思います。しかし、水を通じて環境に目を向けるようになり、大場さんの案内で初めてゲンジボタルを見た時、言葉にできない感動を受けました。この美しい光を家族に見せたいと思い、さらに、多くの人に見せたい、感動を次の世代の人に伝えなければと思いました。その後、いろいろなことがありましたが、この感動がすべての原点であったと思います。



写真1 里の風景（水田） 千葉県大原町（1990年9月）

こうして、ホタルとの関りが始まり、全国ホタル研究会などに参加し、多くの方と出会い、日本ホタルの会の発足のお手伝いをするようになって、結局、二十数年後の今も身近な環境とホタルに関っています。ホタルとの出会いの感動から水環境と里山の保全を考えるようになりました。三浦半島は、人が生活し、生産する中で、自然との折り合いをつけ、それが原風景となっています。こうした風景を求めて、仲間と一緒にいろいろなところを訪ねました。全国各地にその地域性に根ざした風景があります。三浦半島だけでなく、各地に残された懐かしい風景、そして環境を現代の生活様式や価値観の中で残していくことができるかを考えなければなりません。

さて、本稿は、「ホタルと私」という視点で書かせていただいています。きっかけはともかく今は、日本ホタルの会を通じての活動がすべてです。地域での活動は行っていませんので、日本ホタルの会を通じホタルを象徴とする身近な自然環境の保全、再生に役立てればと考えています。環境に対する世の中の考えが変わり、自然との共生が広く語られるようになって、日本ホタルの会の意義も変わってきた部分があると思います。以前は、ホタルを再生するために必要な調査・検討を依頼されることや相談を受けるということが多かったと思いますが、今は、そういったノウハウがある程度行き渡って、コンサルティングする所も



写真2 里の風景（ため池） 千葉県大原町（1990年9月）

多くなり、本会がマンパワー的にそういった業務を受けられない状況もあって、コンサルタント的なニーズは少なくなってきました。このことから、当会にできること、そして求められていること常に考え、発足時から掲げている理念を失うことなく、皆様のニーズに応じていくことが必要と考えています。それが、今の「ホタルと私」であると思います。

日本ホタルの会は、ホタルを会の名前に冠しながら、身近な環境の保全こそが大切なことであるという考えのもとで1992年に発足しました。「ホタルと身近な自然の象徴と位置づけ、ホタルを通じて自然環境を考えること」を理念とし、情報の発信や保全活動の支援などを続けています。しかし、上記のとおり、当会の状況やニーズの変化がありますので、日ごろから活動のあり方について考えていなければならないと思います。

こうした中で、私が、ホタルの会で進めなければならないと思うのは、「ホタルの光を見たとき、自然に触れたときの感動」を伝えることだと考えています。日本ホタルの会は、ホタルだけに注目するのではなく、それを支える環境こそが重要で、その環境が人間にも必要なものだと言ってきました。また、生物の移動について、地域固有の生態系を損なう危険を回避するため、できるだけ地域内や周辺での生物移動を推奨するという考えを示しています。こうした、主張や情報発信は、重要なことで、当会の存在意義を示すものであると考えています。しかし、そうであっても、多くの人に伝えていく必要のあるものは、「感動」であると思います。自然のもつ力、すばらしさに出会い感動することが、多くの言葉を尽くすよりも大切なものを理解することになると考えています。そして、その気づきが、身近で心なごむ環境を守っていくとする力になると信じています。環境への思いは、同じ経験をしていても人それぞれ違います。行動を起こすか起こさないかという違いもあります。しかし、一人一人の小さな思いや小さな行動が、

大きな流れを作り出していき、大きな世の中の流れになると信じています。ですから、一人でも多くの方に感動を伝えたい、特に、子どもたちにホタルを見せたいと考えています。ホタルの会の行事の中でも、ホタル観察会や子どもを対象とするイベントは、重要と考えていますし、立場を離れて私自身もとても楽しみです。

日本ホタルの会の主なイベント活動は、観察会のほか、シンポジウムと談話会を行っています。観察会は、実際にホタルの光を観察し、ホタルの生きる環境を実感し、その地域でホタルと自然を守り育てている人たちの努力、苦勞、信念を知ってもらおうとするものです。この観察会には、ホームページを通じて催しを知った、初めてホタルを見る人などもいらっしゃいます。裾野を広げていくという意味で大切なものと考えています。昨年は、残念ながら予定地のホタル発生状況が良くなかったため、中止とせざるを得ず非常に残念でした。

次に、シンポジウムは、ホタルと環境保全について、その年のテーマを定め基調講演、事例報告、意見交換などを行う観察会よりは少し専門的な内容となっています。直接対話のできる貴重な機会であると考えております。

この2つの大きな催しのほかに、談話会を開催しています。最近は、子ども向けのイベントにするよう工夫しており、今後重要性が増してくるのではと思っています。昨年3月に、多摩動物公園と共催で「光をつくる実験」を行いました。多摩動物公園では、以前コウロギ相撲でもお世話になりました。普段虫に触れることが少ない子どもたちも、自分の仲間になったコウロギを戦わせ夢中になっていたのを思い出します。コウロギの持つ性質を相撲という形で、遊びの中で学び、それが自然やいきものを理解する発端になるかもしれません。上にも書きましたが、同じ体験でもその印象はそれぞれだと思います。その中から一人でも多く、自然を大切に思う子どもが出てきてくれ

ば大成功であると考えています。

コウロギはさておき、今回の催しは、生きているホタルの観察ではなく、ホタルの気持ちになって、自分たちで光を作って見ようというものでした。今、子どもたちの理科離れ、科学離れが起こっているといわれていますが、実験がきらいな子どもが多くなった訳ではないだろうと思います。楽しい実験やチャレンジの機会が少なくなっていて、子どもたちの方も少し面倒くさいなと思っているのではないのでしょうか。実は、このイベントでも子どもたちが集まりませんでした。そこで、創価大学の学生諸君が声をかけて、背中を少し押してあげると次第に子どもたちが集まり、実験に参加してくれました。その時の写真がありますが、最初は何が起こるだろうという顔だった子どもたちが、みんなとても生き生きとした顔になり、自分の試験管の中が光始めると声をあげていました。子どもたちは、今も昔も同じように驚き、感激する感性を持っています。これを体験する機会を提供していくことが私たちがしなければならないことであると考えています。心に残るホタルの神秘的な光、わくわくするような実験など、子どもたちに自然、科学、そして環境を考える機会をこれからも用意していきたいと思います。子どもたちに感動を伝えていくこと、それが、これからの「ホタルと私」です。

(ほんだ かずひこ)

ホタルの名前について（４）

日本ホタルの会副会長 鈴木 浩文

ホタル亜科 文献 1, 2, 3, 4, 5

ホタル属 (*Luciola*) 文献 1, 3, 4, 5

26. ゲンジボタル (*Luciola cruciata*) 文献 1, 2, 3, 4, 5

27. ヤエヤマヒメボタル (*Luciola filiformis yayeyamana*) 文献 1, 2, 3, 4, 5

ヤエヤマボタル 文献 1, 3

この種は松村松年(1918)によってヤエヤマボタル(*Luciola yayeyamana*)として記載されましたが、中条・佐藤(1971)によって台湾に生息する *Luciola filiformis* の亜種として扱われました。しかし、その後の扱いは統一されていませんでしたが、文献 5 では *Luciola filiformis* の亜種の *Luciola filiformis yayeyamana* としています。

28. クロイワボタル (*Luciola kuroiuae*) 文献 1, 2, 3, 4, 5

29. ヘイケボタル (*Luciola lateralis*) 文献 1, 2, 3, 4, 5

30. クメジマボタル (*Luciola owadai*) 文献 5

31. ヒメボタル (*Luciola parvula*) 文献 1, 2, 3, 4, 5

この種は Kiesenwetter (1874)によってホタル属の *Luciola parvula* と記載されましたが、Yuasa (1937)がヒメボタル属 (*Hotaria*)を新設し、この属に移しました (*Hotaria parvula*)。その理由は次の 3 つです。1) メスの後翅がない。2) メスよりもオスの体の方が大きい。3) 幼虫が陸生である。ゲンジボタル、ヘイケボタルは日本を代表するホタルで、これらが真のホタル属のホタルであると、ほとんどの日本人研究者は信じていました。そのため Yuasa の指摘通り、ゲンジ・ヘイケボタルとは形態的にも生態的にも異なるヒメボタルを別属として扱うことに異論はでませんでした。しかし、ホタル属の模式種である *Luciola italica* を調べてみると、ヒメボタルに極めて類似しており、Yuasa が指摘した 3 つの性質を備えていました。すなわち、ヒメボタルはホタル属のホタルであり、むしろゲンジボタル、ヘイケボタルの方に別の属名を考える必要があるのです (文献 5)。

32. ツシマヒメボタル (*Luciola tsushimana*) 文献 1, 3, 5

バパリボタル 文献 2, 4

この種も最初はホタル属として記載されましたが、ヒメボタル同様にヒメボタル属として扱われてきました。しかし、上述のヒメボタルと同じ理由でホタル属に戻されました（文献5）。パバリボタル (*Luciola papariensis*)は現在の北朝鮮から記載された種で、韓国からは極めて類似したウンモンボタル (*Luciola unmunisana*)が記載されています。ツシマヒメボタルを含めたこれら3種は、同一種であるかどうかという問題があるのですが、北朝鮮からの情報が乏しい現状では、保留されたままになっています。

スジボタル属 (*Curtos*) 文献1, 3, 4, 5

33. キイロスジボタル (*Curtos costipennis*) 文献1, 2, 3, 4, 5

34. オキナワスジボタル (*Curtos okinawanus*) 文献1, 2, 3, 4, 5

これまでホタル亜科のホタルとして、キイロボタル(*Luciola japonica*)とコキイロボタル(*Luciola praeusta*)も挙げられていましたが、記載以後これらの種は日本から確認出来ず、原記載のラベルに誤りがあったのではないかと推察されてきました。

キイロボタルについては、模式標本の写真を確認したところ、中国、東南アジアに広く分布する *Luciola chinensis* と同一種である可能性が示されたため、日本の種から除かれました（文献5）。

コキイロボタルについても、この種は東南アジアに広く分布していますが、日本から確認できないことから記載のラベルの誤りと考えられ、日本産のリストから除かれました。

文 献

1. 中根猛彦 (1981) 日本にいるホタルの種類. 中根猛彦・大場信義 著. ホタルの観察と飼育: 81-113, ニューサイエンス社
2. 佐藤正孝 (1985) ホタル科. 黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之 編, 原色日本甲虫図鑑 (III): 121-124, pl 20, 保育社
3. 大場信義 (1986) ホタルのコミュニケーション. 東海大学出版会
4. 佐藤正孝 (1989) ホタル科. 平嶋義宏 監修, 日本産昆虫目録: 315-353, 九州大学農学部.
5. Kawashima, Suzuki and Sato (2003) A check-list of Japanese fireflies (Coleoptera, Lampyridae and Rhagophthalmidae). Japanese Journal of Systematic Entomology 9 (2): 241-261.

(すずき ひろぶみ)

～講師派遣のご案内～

INFORMATION

事務局からの お知らせ

日本ホタルの会では、「ホタルを象徴として自然環境の保全・再生を目指す」という理念のもと、全国への啓蒙活動を進めるため、講師派遣を行なっております。

お申し込みやお問い合わせは、メールにて承ります。下記、事務局メール宛にお問い合わせください。尚、時期や内容などによりお引き受けできない場合もございますので、あらかじめご了承くださいませようお願いいたします。

【1】現地調査および地域保全・再生アドバイス

地域の要望に応じて講師を派遣し、環境保全・再生方法をアドバイスします。

- 地域環境の診断
- 人工水路および飼育技術に関するアドバイス
- ホタルをシンボルとした地域環境の保全に関するアドバイス など

【2】体験学習・観察

こどもを対象とした体験学習の場を提供していきます。

- 実物（生体、標本、写真）の卵・幼虫・成虫を用いた観察と解説
- 発光実験を通じて迫る生き物の不思議
- 里山観察会（水生および陸生ホタルの解説）
- ホタル再生および飼育入門 など

【3】講演

- ホタルの生態解説（水生・陸生）
- ホタル再生方法と事例、飼育技術の紹介および留意点
- ホタルが生息する地域環境、里山環境の保全
- ホタルの遺伝的多様性を考慮した保全・再生 など

この一貫として、2008年10月に当会理事の渋江桂子氏が東京ホタル会議創立15周年記念“2008ホタルサミット in 立川”にて、「ホタルをシンボルとした地域自然環境の保全」というテーマで講演を行ないました。

ホタルのニュースレター（第47号）

2009年3月31日発行



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

〒197-0011 東京都福生市福生487（日本ホタルの会事務局）

TEL&FAX：042-530-2111

e-mail：inoue@nihon-hotaru.com URL：http://www.nihon-hotaru.com

印刷 文明堂印刷株式会社 〒239-0821 神奈川県横須賀市東浦賀町1-5

TEL：046-841-0074 FAX：046-841-0071